

Catwalk



[特集]

『チェーホフを待ちながら』

まつもと市民・芸術館
Matsumoto Performing Arts Centre

vol.
08
2026
Winter

まつもと市民芸術館プロデュース

『チェーホフを 待ちながら』

という体で展開する。

千葉雅子演じる亡き夫を忘れられない妻と、その夫が借りた金の返済を求める、武居卓演じる来客の男を巡る『熊』では、二人が噛み合わない会話を繰り広げるうち、徐々に思いを変化させていく様子をキュートに表現。貞淑な妻がどんどん可愛らしさを増していく様子に、客席から温かな笑い声が上がった。

『煙草の害について』では、恐妻家の妻に言われて壇上に上がった山内圭哉演じる男が、何度も横道にそれながら、自分の「苦境」を訥々と語っていく様子を哀愁に満ちた様子で表現。普段は豪快な役を演じることも多い山内が、肩をすばませ情けない表情で舞台に立つ姿はそれだけでおかしく、忍び笑いを引き起こした。

『結婚申込』では、土田率いるMONOの劇団員・金替康博がプロポーズに来た男を、新谷真弓がプロポーズを

客席についてまず目に飛び込んでくるのは、舞台上に吊るされた幾本もの縄。下部が丸く結ばれたそれらの縄が、どうにも不穏な空気を放っている。開演と同時に現れたのは、退屈さを全身で表している面々。靴を何度も履き直したり、やる気なく本をめくったり、足を投げ出してだらしない座ってみたい。見るからに「待ちくたびれた」様子の彼らは、「こうなると首を括るしかないかな」とぼんやり縄を見上げていた。とそこへ意気揚々と一人の男が現れた。「待ち人來たる」かと湧く一行だが、男が自信満々に「私がゴドーです」と名乗ると、一行は一気にトーンダウン。彼らが待っていたのは、アントンなのだった。

アントン・チェーホフの初期ウォードビル作品をオムニバス形式で潤色する本作では、「アントン（チェーホフ）」がやって来るのを待つ面々が、その待ち時間の間に寸劇を繰り広げる



REVIEW



まつもと市民芸術館プロデュース
『チェーホフを待ちながら』
2025年11月6日(木)～9日(日)
まつもと市民芸術館 小ホール
2025年11月12日(水)～16日(日)
KAAT神奈川芸術劇場〈大スタジオ〉

原作：アントン・チェーホフ
脚本・演出：土田英生
出演：山内圭哉 千葉雅子 金替康博
新谷真弓 武居卓 土田英生



待っている女を、武居が女の兄を演じた。『プロポーズをしたい』/「それはい」という思いがありつつも、それぞれの主張を曲げられない3人。そのせめぎ合いがテンポよく描かれた。公演前のインタビューで土田が「金替がやる『結婚申込』は面白い、ハマリ役」と語っていた通り、金替演じる男は実に人間くさく、憂いがあり、チャーミングだった。

最後の『余儀なく悲劇役者』では、「よく切れる包丁を買った」と話す千葉演じる女と、「死にたいからその包丁を貸してくれ」と新谷演じる女が延々と話し続ける様が描かれる。話の内容はシリアスなのに、まるで公園のベンチで他愛ないおしゃべりをしているような呑気さがあり、人生のある一面を切り取ったような作品だった。

作品の間と間には、「かもめ、いた?」「モスクワへ行こう」などチェーホフの世界観をちらつと想起させるセリフも。チェーホフの人間観と土田の人間観、その両方が詰まった公演となった。

熊井玲(ライター)





東京フィル の in Matsumoto 午後のコンサート

東京フィルの午後のコンサート
in Matsumoto
《音楽もの・かたり》
2025年11月22日(土) 15:00
キッセイ文化ホール 大ホール
指揮とお話：円光寺雅彦
語り：石丸幹二
演奏：東京フィルハーモニー交響楽団



音楽と想像力が互いに響き合う午後のひとときであった。

これまで一〇〇回を超える公演を重ねてきた「東京フィルの午後のコンサート」。松本では初の開催となる。今回のテーマは「音楽もの・かたり」。東京フィルハーモニー交響楽団、指揮者・円光寺雅彦、そして歌手・俳優の石丸幹二が「語り手」としてタッグを組んだ。「クラシックは敷居が高い」というイメージを優しく解きほぐし、市民が自然体で音楽と向き合える場をつくりたい——こうした背景から、まつもと市民芸術館・芸術監督団の一人でもある石丸たつての希望で実現したと聞く。

やわらかな陽射しに包まれた午後、キッセイ文化ホールでコンサートの幕が上がった。客席には子どもから大人まで幅広い層の人々が集まり、音楽が共有される場の豊かさを物語る。一曲目《ウィリアム・テル》序曲の颯爽たる響きが会場を駆け抜けたのち、円光寺と石丸が軽妙な語り合いで会場を温め《ピーターと狼》へと続く。プロコフィエフが子どものために書いたこの作品は、勇敢で機知あるピーターが小鳥と協力して狼を捕らえるおとぎ話だが、何と言ってもキャラクターたちが各楽器とライトモチーフによって活き活きと表現されていく様が楽しい。ホルンが狼の重厚さを、クラリネットが猫のしなやかさと

気まぐれさを描き、小鳥は軽やかなフルートで羽ばたく。語り手の石丸の声はオーケストラと緊密な対話をなし、語りと音楽が互いに越境しながら、私たちはしだいに劇中世界へと導かれてゆく。

第二部は、円光寺と石丸による聴衆からの質問コーナーから始まった。喉のケアや松本の食文化に話が及ぶなど、舞台と客席はなかなか空気に包まれ、その流れを受けて演奏された《オペラ座の怪人》では、種々のナンバーがオーケストラによって歌われてゆく。聴衆も静かに、時に身体を揺らしながら聴き入っている。クリステイヌの心の揺れや、ファンタムの内なる孤独を想像しながら、それぞれの心の中で舞台を立ち上げているのだろう。最後の《ハリー・ポッターと賢者の石》では、石丸の語りが先導役となり、オーケストラは映画音楽の持つ物語性と情景を描き出した。

こうして二時間は瞬く間に過ぎていった。音楽と声、語りと想像力——物語のイメージが行き交う、豊かで自由な時間であった。七月にまつもと市民芸術館で開催されたコンサート『はじめまして!』と同じく、音楽が持つ生きた魅力をあらためて思い起こさせる演奏会であった。

濱崎友絵（信州大学人文学部教授）

チャオ! バンビーニ 2025 AUTUMN

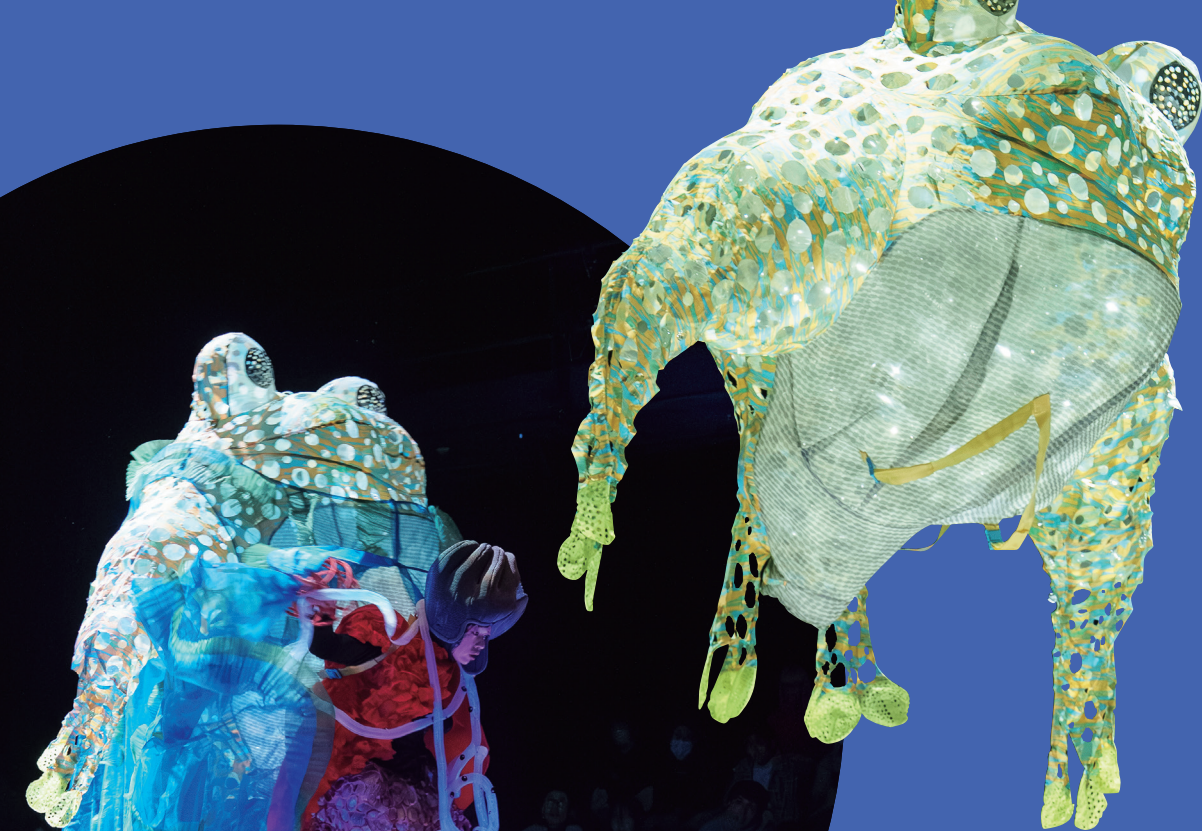


Photo: Koichi Imai

チャオ! バンビーニ2025 AUTUMN
2025年11月23日(日) 24日(月・休)
衣装: ひびのこづえ
音楽: 小野龍一

『ROOT: 根』
出演: アオイヤマダ
『アリとキリギリスと』
出演: KUMI 平位蛙 RIHITO

REVIEW

ダンサーだけではなく、アーティストとしてさまざまなジャンルで注目を集める松本市出身、アオイヤマダが、まつもと市民芸術館で初めてのソロダンス公演、ワークショップを開催した。11月23日、24日の、子どもたちのお祭り「チャオ! バンビーニ2025 AUTUMN」でのこと。コスチュームアーティスト・ひびのこづえが、「子どもから大人、おじいちゃんおばあちゃんまでが楽しめる作品を」と企画・衣装を手掛け、小野龍一が音楽を担当し、アオイヤマダの『ROOT: 根』、KUMI×平位蛙×RIHITOの『アリとキリギリスと』を上演した。どちらも、ひびのこづえの個性的でユーモアあふれるフォルムの衣装が童話をイメージした世界に、観客を誘った。

22日に行われたアオイヤマダのワークショップは、4歳から大人まで対象者が広い。会場には本当に幼い子どもから、実は楽しみにしていたのは大人の方だと思いきお父さんお母さん、東京や愛知から遠征してきたファンの方などが顔をそろえた。すると、なんとアオイヤマダがトップガーデンの向こうから、夕日を背に、衣装姿で踊りながら登場する。スタジオの巨大なガラスを挟んで内と外、参加者と交流する。つかみはオッケー、参加者のワークもさらに急上昇したようだ。



ワークショップもダンスのテクニクではなく、想像力をどれだけ広げられるかを大切にしていたものだった。参加者はおたまたまじやくしから始まり、成長したカエルとして奔放に踊る。「もつと真剣に」と叱咤する声にも、みんなの笑顔が絶えない。その後、カエルつながり子どもたちが集めた「いきカエル」の「振りカエル」「入れカエル」などの動きをみんなで踊り、最後は『ROOT: 根』で使用される「しょうがないのうた」に合わせ、生薑をすりつぶすような振り付けで踊った。

『ROOT: 根』は、アオイヤマダとひびのこづえが5年前につくった作品。巨大なカエルの衣装で登場したアオイヤマダが、徐々に衣装を脱いでいく。まるで素の自分を取り戻すように。「しょうがない」という言葉は、ネガティブに、ポジティブにも聞こえる不思議さを秘めている。アオイヤマダも「しょうがない」を繰り返して、ここまで来たのだらう。松本で『ROOT: 根』を上演することは、明らかに他の地とは違う、ダンサーとしてのルーツを確かめるような作業だったかもしれない。『アリとキリギリスと』は、ストーリー



まつもと市民芸術館では、アクセシビリティについても積極的に取り組んでいます。11月上演の『チェーホフを待ちながら』では、初の試みとして音声ガイドが実施されました。その音声ガイドを制作した松田高加子、ナレーターの特丸あいと木ノ下による座談会をお届けします。

——皆さんの最初の接点は？

木ノ下 僕がナビゲーター役を務めた『能でよむ〜漱石と八雲〜』（2000年）という鑑賞サポートに主軸を置いた企画で、初めてお二人のお仕事を拝見しました。『こういう世界があるんだ！』と僕のターニングポイントになりました。この作品は、2023年に松本でも上演しましたね。

松田 能楽に関する企画で、『私たちは能をどこまで目で見ていいのか』を考える内容だったこともあり、音声ガイドを付けるときにもその点は意識しました。『言い過ぎないように、でも押さえるべきところは押さえない』と考えましたね。

木ノ下 「音声ガイドってどういうものですか？」と聞かれたとき、お二人はどういう風に答えているのですか？

松田 私は映画の音声ガイドを担当することが多いのですが、視覚を使わずに映画を観ても安心して楽しめるようなもの、とよく説明します。また視覚障害の方はよく「音声ガイ

ドがない場合は、頭の中に付箋をつけていくような感じで見る」とおっしゃるんですが、音声ガイドを使えば脳内にいちいち付箋を貼らずに、周りと同じタイミングで情報が掴めますよ、と。『音声ガイドがあると情報が増える』と思われる方が多いようなので、私はそこを大切にしたいと思っています。

持丸 私は劇場の音声ガイドを担当することが多く、リアルタイムでお客様と作品をつなぐお手伝いをしている感覚を持っています。作品をみんなで共有することでコミュニケーションが生まれる瞬間もたくさん見てきました。ですので、みんなが同じように作品を楽しむために音声ガイドがある、と答えています。劇場は公共の場であり、さまざまな人が交わる場所なので、そこから街も良くなればいいなと思っています。

木ノ下 芸術館では『ひらく〜劇場』をスローガンに掲げていて、『ひらく』ための大きな要素の1つになるだろうなと思っています。今回、『チェーホフを待ちながら』で初めて音声ガイドを実施しましたが、松田さんが原稿をお書きになり、持丸さんがしゃべるといふ、スペシャルなタッグで臨みました（笑）。

——音声ガイドがつけやすい演目、難しい演目というのはあるのでしょうか？

持丸 ダンスなど、セリフがないものは難しいです。手足が同時に動く振付があったとき

に、両方説明するのか、どちらかに絞るのかで伝わるイメージが変わってしまうため、どこにスポットライトを当てて組み立てていくか、よく考えます。演劇では、どんな状況が変わっていく演目は、音声ガイドが難しいですね。尺の問題もあり、音声ガイドとしてそんなにたくさんの情報を伝えることはできないので、伝え方の工夫が必要です。

松田 映画はスクリーンという枠の中で観るもので、監督の「ここを見てほしい」というところがある程度決まっていますが、演劇はある意味枠がないので音声ガイドを付けるのが難しいですね。ただ、実は演劇のほうが音声ガイドいらずだと思うところもあって、それは人がそこにいるから足音や気配が感じられますし、役者さんの声質の違い、どこで声が出ているかといったことすべてが、音声ガイドになりえるからです。

——お二人は木ノ下歌舞伎作品の音声ガイドも担当されています。古典作品を原作とした木ノ下歌舞伎の場合は、特に多くの補足が必要ではないかと想像するのですが、その点で苦労はありましたか？

持丸 そうですね。所作のことに触れないと『ちよつと昔風に読んでいる現代演劇』で終わってしまうところがあるので、どこまでガイドに入れ込むかは考えました。

身体動きは歌舞伎の所作だったり、またその逆だったりという感じで、木ノ下歌舞伎では言葉と体が乖離してる瞬間がたくさんあり、その間（あわい）が作品全体の空気を作っているから、どこまで説明したら良いかについて悩まれた、ということでしょうか？

持丸 そうです。そもそも『音声ガイドがなくても、ある程度想像だけで楽しめる』という人に対して、耳うるさく感じない音声ガイドとは？と考えると、誰に寄り添って作ったほうがいいのかという問題は常にある。

木ノ下 視力も感性も人によってちがうから、そこが難しいし、また楽しくもありますね。

——反対に、お二人と協働したことで木ノ下さんが受けた刺激はありますか？

木ノ下 お二人はどうしたらもっと伝わるかを一言二言レベルでギリギリまで精査するんですね。その姿を見て「こういうことがしたいんだ！」と改めて感じました。また音声ガイドってすごく特殊なことのように見えて、実は浄瑠璃と似ているというか。浄瑠璃の地の文はお客さんの理解を先回りするようなこととせず、登場人物の動きなど、舞台上で起こることをそのまま語っているんです。という点で浄瑠璃はすごく音声ガイド的だなと思いますし、音声ガイドを介して古典を見直したとき、日本人は自然とアクセシビリティを取り入れてきたのだという発見があります。

松田高加子 左
Takako Matsuda

音声ガイド制作者。2001年頃、視覚障害のある人と映画鑑賞を楽しむサークルに参加。仲間たちと制作のノウハウを積み上げる。映画配給会社勤務を経て、現在は映画や演劇の音声ガイド制作のみならず、エンタメ分野のバリアフリー相談等も受けている。

持丸あい 中
Ai Mochimaru

バリアフリーナレーター。声優デビュー後、ナレーションを主軸に活動。2014年より音声ガイドの台本制作・実況に携わり、演劇・ダンス・スポーツ・イベントなど幅広いジャンルでバリアフリー化に取り組む。



音声ガイドが “ひらく”、 劇場への 新たな入り口

松田高加子×持丸あい×木ノ下裕一

身体〰️しんたい〰️ではなく
身体〰️からだ〰️と読もう

身体と音楽

にたちあつて

倉田翠芸術監督企画「身体と音楽」からだとおんがく」の第二回は、2025年8月23・24日に行われました。コンテンポラリーダンス、つまりバレエとかモダンダンスとかではない多様な〈芸術系〉ダンス・アーティストひとりと、音楽といっても楽器演奏から環境音的音作りやノイズまで、幅広い領域で活躍する音楽家ひとりが、時にがっちり時にゆったり「協演」というより「競演」する三作品の連続上演です。

二回目の今回は、大宮大奨と中島水、大森弥子と吉田野乃子、白井剛とDillの三組が松本市美術館の中庭で、それぞれの作品を披露しました（前者がダンサー、後者が音楽家）。初日の23日はこの順番で、二日目の24日はこの逆の順序でした。それぞれが実績と実

力のあるアーティストたちです。ちょうど日が暮れかかる18時過ぎからはじまるこのイベントは、昼間の暑さがまだ強く感じられる野外で上演されます。当初はにじむ汗を肌を感じ、徐々に日が暮れていく夏らしい光景に

眼をやり、空を飛び交う単に戻る鳥のけたたましい声に耳を傾けたりします。美術館の中庭ではあっても、自然というか日常の一部として、これらの上演に参加している感じに私たちはなるのです。よしとと負って、何かを鑑賞するぞ！ という「観客」ではなく、いつの間にか始まるダンスと音楽の協演／競演、それも、それぞれがまったく異なる身体（からだ）で、それぞれがまったく異なる音楽／音響／ノイズとともに、いろいろと動いたり動かなかったりするのを、見て聞いて感じる

（だけ）の「生活者」として、そこに居合わせる感じです。

ここでは、いろいろな動きに眼をやり、いろいろな音に耳を傾け、自分の身体（からだ）で何か感じればそれでよいのです。あ、いや、そうしろと、この作品やアーティストたちが私たちに命じているわけではありません。そういう上演環境、そういうダンス、そういう音／音響で、これらの作品は上演されるからです。それは企画者の意図といえるものかもしれませんが、「押しつけがましい」の正反対にある「お誘い」です。

倉田さんが言うように、この企画では、「気軽に、堅苦しくなく、まずは人の身体を見る楽しさに出会っていたきたい」ということなのでしょう。だからこそ、「身体」という漢字二文

字は「しんたい」ではなく「からだ」を読むほうがふさわしい。「人のからだ」を見る楽しさです。いやあ、「からだ」っていろいろ動くなあ、いろいろなことするなあ、いろいろなイメージを与えてくれるなあ。しかもここでは、聞こえてくる、これもまたそれぞれ独特の「音／音響」となんだか関係しているように、あるいはしていないように、です。だからこそ「からだ」とおんがく」の企画です。

こんな贅沢な時間と体験はめったにありません。何を見ても何を聞いても何を感じてもいいという自由こそ、この企画のコアにある原理です。そしてそれは今どきありえないほど人間的で普遍的な原理なのです。

内野儀（演劇批評）



Dance

大宮大奨 × 中島水



Music



Dance

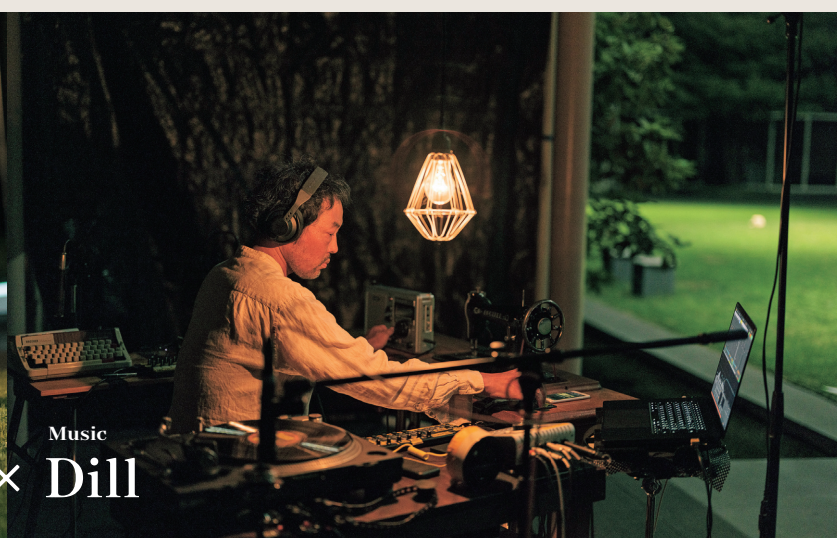
Music

大森弥子 × 吉田野乃子

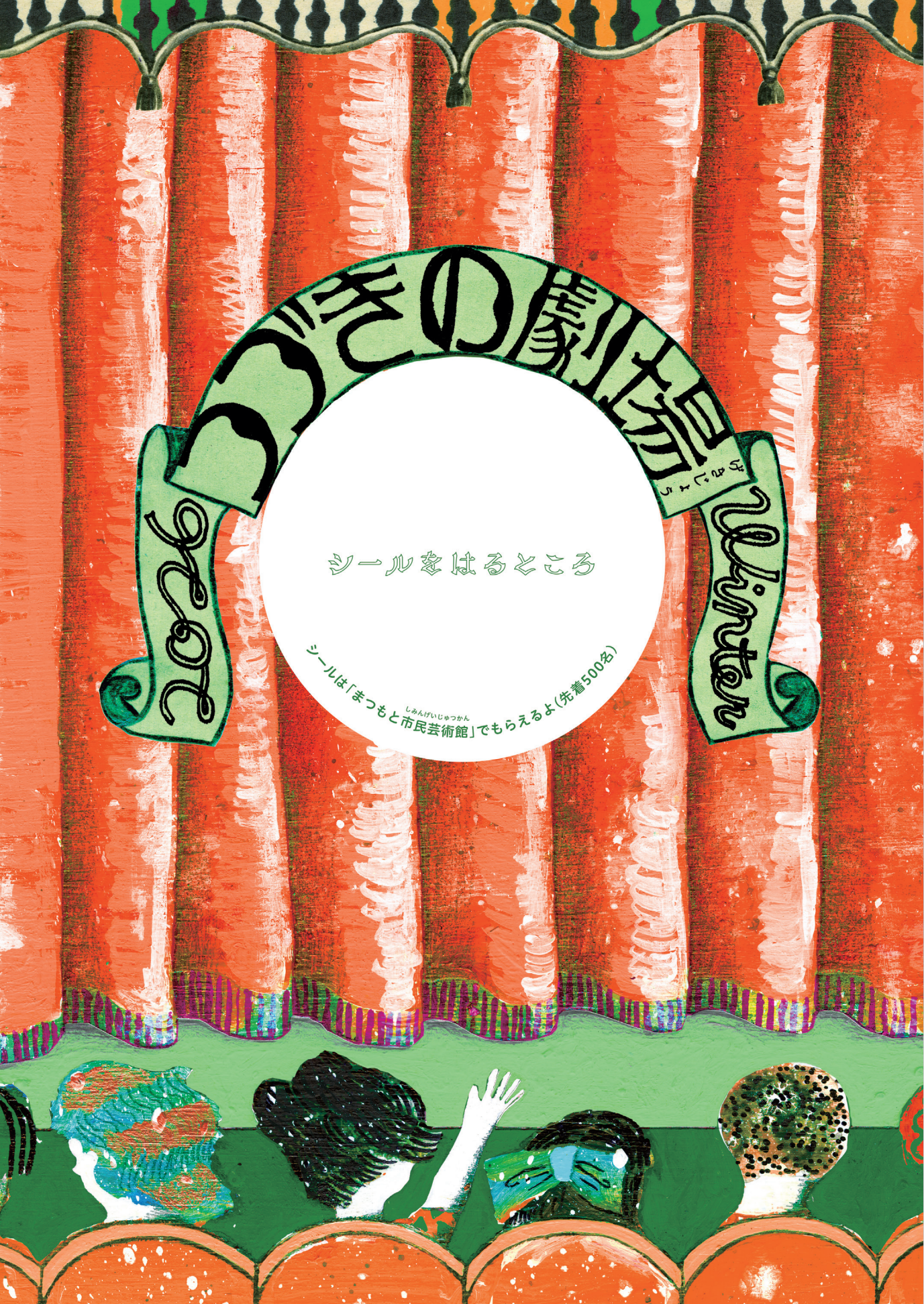


Dance

白井剛 × Dill



Music



公演情報はぬり絵の後にも掲載しています

2月21日発売

『娑婆 身体表現クラブ』

4月18日(土) 14:00、4月19日(日) 14:00
小ホール

演出・構成: 倉田 翠

出演: 中條 玲 西田悠哉 花形 模 堀田康平
前田斜め/倉田 翠

料金: 全席指定(税込)
一般 ¥2,000/U25 ¥1,000

※未就学児入場不可
※U25 (25歳以下) チケットは枚数限定・前売のみ、
また当日年齢確認をご提示ください。



シールをはるところ

シールは「まつもと市民芸術館」でもらえるよ(先着500名)
しめんげいじゆつかん

2月28日発売

みんなのコンサート

『はじめまして!』

4月26日(日) 11:00
松本市音楽文化ホール(ザ・ハーモニーホール)

出演: 石丸幹二 木ノ下裕一 倉田翠
クリヤ・マコト(ピアノ) 林周雅(ヴァイオリン)
JKim(キム・ジーヒョン) マー・ジンジン(揚琴) ほか

料金: 全席指定(税込)
一般 ¥3,500/U25 ¥2,000/小学生以下 ¥1,000
おやこ券 ¥4,000

※おやこ券は一般1枚と小学生以下1枚のペア券です。



Information

SIDE

A

B

『Catwalk/ねこあるき』Vol.8

2026年1月16日発行

発行 まつもと市民芸術館
〒390-0815

長野県松本市深志3丁目10番1号
Tel 0263-33-3800 Fax 0263-33-3830

E-mail mpac@mpac.jp
URL <https://www.mpac.jp>

デザイン 清水貴栄・小林慎太郎

印刷 藤原印刷株式会社

※禁無断転載

■郵送サービス

『Catwalk/ねこあるき』の郵送をご希望の方は、
郵送費用分の切手(1号180円)を下記へお送りい
ただければ送付いたします。その際、お名前・ご
住所・何号をご希望かを必ずご明記ください。

〒390-0815 長野県松本市深志3丁目10番1号
まつもと市民芸術館 広報誌担当 宛

『Catwalk/ねこあるき』は、まつもと市民芸術
館のほか、市内公共施設、市内飲食店、全国の
劇場施設などに置いてあります。

■チケット購入・お問い合わせ

[まつもと市民芸術館チケットセンターのご案内]

①電話 0263-33-2200(10:00-18:00)

②インターネット <https://www.mpac.jp>
(要事前会員登録・無料)

③窓口 芸術館1階(10:00-18:00)

[芸術館チケットクラブのご案内]

※まつもと市民芸術館ホームページよりご登録ください。
※インターネット予約が可能(一部公演をのぞく)。
※メールマガジンにて最新のチケット情報や公演案内を配信。

■アクセス

[バス] JR松本駅お城口(東口)より、
駅前バスターミナルから「市民芸術館前」下車

[徒歩] JR松本駅お城口(東口)から
「あがたの森通り」を東へ800m、徒歩10分

※駐車場の用意はございません。
公共交通機関や有料駐車場をご利用ください。
※近隣商業施設等への無断駐車は
他のお客様のご迷惑になりますのでご遠慮ください。

『Catwalk/ねこあるき』は、まつもと市民芸術館の広報誌です。『Catwalk』は芸術館の情報『ねこあるき』は街の情報を中心に紹介し、両側から読めるようになっています。またCatwalk(=キャットウォーク)とは、劇場のステージや客席の上のスタッフしか歩くことのない細い回廊のことを言います。



ぬりえ

ここは「^{げきじょう}つづきの劇場」です。^{やくしや}役者たちに^{いろ}色とセリフがまだついていません。

^{つづき}続きを^{かいて}かいて^{げき}劇を^{かんせい}完成させてください。^{かんせい}完成できたら^{きん}金メダルシールをもらえます。

発売中

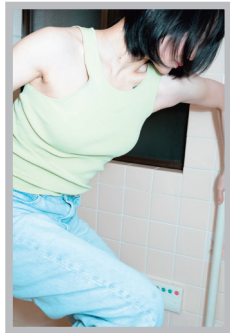
『倉田翠ダンスソロ／まつもと』

1月17日(土) 14:00、1月18日(日) 14:00
小ホール

構成・演出・出演：倉田翠

料金：整理番号付自由席(税込)
一般 ¥3,000/U25 ¥1,000

※未就学児入場不可
※U25 (25歳以下) チケットは枚数限定・前売のみ、
また当日年齢確認をご提示ください。



発売中

ONEOR8『ママごと』

1月31日(土) 14:00
小ホール

作・演出：田村孝裕

出演：
福田沙紀 須賀健太
恩田隆一 富田直美 山口森広
重田千穂子 安達忍 岡のりこ
関口アナン 小口ふみか
佐藤B作

料金：全席指定(税込)
一般 ¥4,500/U25 ¥2,000

※未就学児入場不可
※U25 (25歳以下) チケットは枚数限定・前売のみ、
また当日年齢確認をご提示ください。



公演情報はぬり絵の後にも掲載しています



発売中

ひらく古典のトビラ 其の5 『みんなのための古典芸能』

2月14日(土) 14:00
小ホール

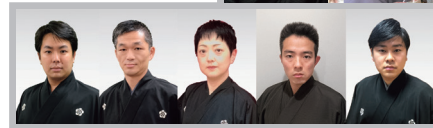
企画・構成・進行：木ノ下裕一

上方落語：桂吉坊／(舞台手話通訳) 長谷川さとみ
贅女(ごぜ)唄：広沢里枝子

手話狂言：日本ろう者劇団(江副悟史 砂田アトム
鈴まみ 五日市十夢 長谷川翔平
(声の出演) 三宅狂言会

料金：全席指定(税込)
一般 ¥3,500/U25 ¥1,500/セット券 ¥6,000
障がい者割引 ¥3,000

※未就学児入場不可
※U25 (25歳以下) チケットは
枚数限定・前売のみ、
また当日年齢確認を
ご提示ください。



発売中

ひらく古典のトビラ 其の6 木ノ下亭～東西共演！ 江戸の意気と上方の粋(すい)～

3月11日(水) 14:00
小ホール

出演：柳家喬太郎 桂吉弥
席亭：木ノ下裕一

料金：全席指定(税込)
一般 ¥3,500/U25 ¥1,500
セット券 ¥6,000
障がい者割引 ¥3,000

※未就学児入場不可
※U25 (25歳以下) チケットは
枚数限定・前売のみ、
また当日年齢確認を
ご提示ください。



《セット券注意事項》

- ・「ひらく古典のトビラ 其の5」一般券1枚と、
「ひらく古典のトビラ 其の6」一般券1枚のセット券です。
- ・2公演で一般7,000円のところ6,000円でご覧いただけます。
- ・前売券およびまつもと市民芸術館チケットセンターのみ取り扱い。
- ・予定枚数に達した時点で販売終了となります。

《障がい者割引の注意事項》

- ・当日障害者手帳をご提示ください。
- ・移動に介助が必要な方には、介助者1名につき
一般料金の50%を割引いたします。
- ・まつもと市民芸術館チケットセンター(窓口・TEL)
にてご購入ください。ネット予約不可。

さくノザ・キャビンカンパニー
と

きみのなまえ

それでも、猫が好き。

小島 有



猫と目が合うと、可愛すぎて、まるで石になってしまったかのように体が瞬間固まってしまいます。猫の間合いに入ってしまったかのように、身動きが取れないのです。あの時間はなんなのでしょう？不思議です。CAT TIMEと名付けることにしましょう。みなさま、今年もよろしくお願いいたします。



東アジア文化都市 2026 松本 「ARTS & PEACE」



「東アジア文化都市」は、日中韓文化大臣会合での合意に基づき、3カ国において、文化芸術による発展を目指す都市を選定し、様々な文化芸術イベント等を実施するものです。これにより、東アジア域内の相互理解・連帯感の形成を促進するとともに、東アジアの多様な文化の国際発信力の強化を図ることを目指します。これまでも横浜市を皮切りに新潟市、奈良市、京都市、金沢市、豊島区、北九州市、大分県、静岡県、石川県、と開催され、本年は鎌倉市、そして2026年に選ばれたのが松本市です。

1年間の会期中、演劇・音楽・舞踊・美術・伝統文化等、さまざまな分野で日中韓をテーマにした事業が行われます。その中で、まつもと市民芸術館芸術監督団も特徴的な企画で東アジア文化都市 2026 松本を盛り上げていきます。

ブレ企画として2026年1月に始まるのは、木ノ下裕一芸術監督団団長が〈芸術文化〉を切り口に日中韓の歴史を紐解いていくレクチャーシリーズ「3つの国のあわいで考えるディープレクチャー」。2つのものの間の関係、重なり合い交じり合う空間。それを表す言葉「あわい」を語るレクチャーシリーズ。改修中の芸術館を飛び出して上土劇場で開催します。その他の企画も随時決まり次第に発表予定です。年間を通じて街のあちこちで行われる東アジア文化都市 2026 松本をお楽しみください！



渡辺弘演劇・舞踊・音楽ディレクター (左)と木ノ下団長



芸術館ゆかりのアーティストが選んだ

松本うまいもん

大阪出身ですが、蕎麦は大好きです。小さいときはうどんばかり食べていたので、ちょっと飽きてました。東京のそばのつゆは色も濃くてやっぱり最初はちょっと苦手でした。でも、トッピングに天ぷらとか入れるので、「そうだ、天つゆだと思えばいいんだ！」と閃いてから楽しめるようになりました。以前も何度か松本には来ていて高級なお蕎麦屋さんいろいろ行きました。ただ今回の『チェーホフを待ちながら』は稽古も含めて33泊の長逗留なので立食いそばであのクオリティ、そして並・中・大どれでも680円はとてありがたい！ トッピングのミニ山賊焼きも好きです。



山内圭哉
(俳優)



小木曾製粉所 松本駅前店

長野県松本市深志1-1-1

【営業時間】

10:30～15:00/16:00～20:00



三九郎



松本の冬の行事といえば三九郎(さんくろう)。正月の松飾りなどを集めて焼き、無病息災を祈る火祭りはほぼ全国的に行われていますが、三九郎という呼び名は中信地区独特のようです。三九郎は行事名ですが、作り物自体も三九郎と呼ばれています。名前の由来は諸説あり定かではないそう。

松本では松の内明けに小学生を中心に地域の松飾りやダルマを集め、田んぼや河川敷に木を円錐状に組み、松飾りやダルマを飾って「三九郎」を作ります。燃やす時には米粉で作った団子(繭玉)をヤナギの枝に刺して焼き、これを食べると風邪をひかないと言われています。また書初めを燃やすと字が綺麗になるとも言われています。

以前は1月15日の成人の日に行う地区が多かったですが、現在は子供たちの休みに合わせて日程を早めたり、夜ではなく昼に燃やしたり、繭玉のほかにウインナーやマッシュマロも焼いたり、と時代に合わせて変化しています。



昭和後期、本町通りから眺めるかつての伊勢町通りの入り口。現在だと信毎メディアガーデンを背にして眺める風景。



〔伊勢町通り編〕

松本に暮らす人々にかつての街の風景について取材をし、創作した演劇作品「まつもと、景の声」は、2025年2月、まつもと市民芸術館2階のオープンスペースで上演されました。「まつもと、景の声」の構成・演出を担当した藤原佳奈が、その派生企画として、松本の今と昔の風景について綴っていきます。

2025年2月、「まつもと、景の声」の上演では歌手の玉井夕海さんと共に『交差点から見える風景』という歌を作った。伊勢町通りと本町通りの交差点、信毎メディアガーデン前に立ったあたりから見える風景を歌ったものだ。上演を終えてすぐ、実際に信毎メディアガーデンで撮影した動画をYouTubeにアップした。動画には、2月末に幕を閉じる直前の松本バルコの姿も映っている。これを書いている現在は、もうあのシンボリックな「PARCO」の文字を見ることができないわけで、移住して5年という松本歴が浅い身ながらも、馴染みの風景が移り変わっていくことにはやはり、寂しさを覚えるものだ。

さて、現在の広々とした車道と、両側の幅の広い歩道が続く風景からはなかなか想像がつかないが、伊勢町通りが今のような広々とした姿になったのは昭和60年頃から始まった再開発以降のこと。それまでは、車2台がやっと通れるくらいの車道と、その両側の歩道には買い物客を雨や日差しから守るアーケードが架けられていた。と、書いている私はその風景をもちろん見たことはなく、取材中に当時の伊

勢町商店街の写真を見て衝撃を受けたのだが。昔から松本に暮らす人には馴染み深い風景かもしれないが、道幅が狭く、アーケードが架かる伊勢町商店街の姿にはこれが本当にあの伊勢町か!? と驚き、商店街に飛び交う賑やかな声を想像して、羨ましくも思った。取材では、かつてあったデパート「はやしや」の屋上遊園地で観覧車に乗ったり、アイスを食べたという子供の頃の記憶を懐かしそうに語る人が多かったのが印象残っている。

ところで、その伊勢町商店街のアーケードができたのは、昭和41年頃から始まった商店街の近代化事業からだという。賑わいを羨ましく思うシンボルのように思えたアーケードもまた、一時的な時代の産物なのであった。では、さらに時代を遡り、今想像したアーケードをカポッと取り外してみよう。その昔、伊勢町通りは善光寺街道と呼ばれ、交通の要であった。善光寺に向かって、旅の途中、茶屋で一服し、土産物を求める人々。馬や牛を引き、米や塩を運ぶ姿もあっただろう。



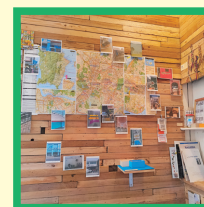
綴る「まつもと、景の声」

「まつもと、景の声」劇中歌『交差点から見える風景』

藤原佳奈 戯曲作家・演出家。わたしたちの〈はたらき〉を聴き、上演の場をひらく。2020年より長野県松本市在住。2024年秋より、劇場実践の場「松のにわ」を始動。毎月最終水曜日に居番丸西で「米はある!」を主催。多分野で協働しながら、身体へのまなざしを分析し、再編を試みる「アートプロジェクトひとひと」を進行中。

まつもと暮らし

2026年に開催される「東アジア文化都市2026松本」。その実行委員のメンバーで松本に移住して4年目の川合沙代子さんにお話を聞きました。



RAULA Coffee and More

小さいお店ですが、イベントやギャラリーの展示がおすすめです。ドーナツがとても美味しいです。
(松本市鎌ヶ崎)



東アジア文化都市の企画もぜひ参加してください♪



菓子壱

いろいろなフレーバーの焼き菓子が食べられます。夏はかき氷や豆花も絶品です。
(松本市丸の内)



むすび農園

子連れでも参加できるコミュニティファーム。畑から見えるアルプスも美しい。
(松本市中山)

自然と近いだけじゃない。移住先に選ぶ松本の魅力

コロナをきっかけに、東京以外の場所に住みたいと思うようになり、自然を求めて、北アルプスに辿り着きました。とはいえ、パートナーも私も東京生まれ東京育ち。「冬の暖房費が心配だから都市ガスの物件に住みたい」と言われ、探してみると松本に都市ガス物件が集中していることを知りました。意気込んで不動産屋さんに相談すると「皆さん、灯油ストーブですよ」と言われて驚きましたが、でも考えると都市的な便利さもある松本の特徴に気づききっかけにもなりました。自然には近いけれど、人里離れすぎてもいない。松本はそんな意味でもちょうどいい場所でした。

住んでわかった松本のシビックプライド

「天守は壊すより、残す方が新しい文化が生まれる」明治時代に松本城が市民活動によって守られたというストーリーに出会った時に心が震えました。それから150年たった今でも、古いものを大切に

ながら、自分たちのセンスを育てているような人たちにたくさん出会います。そんな自分たちの好きを集めたようなお店にあるものこそ、松本みやげだと思っています。

食卓が楽しい、松本での暮らし

私は週に一度、農家さんのお手伝いをしています。3時間という週全体の1%にも満たない短い時間ですが、それでも自分が口にするものに直接触れる体験は、暮らしそのものを豊かにしてくれる気がします。雨が少なく標高が高い松本で育った野菜は、密度が詰まって味が濃い。旬の野菜を知ること、この土地の風土を知ることにもつながります。暮らしと向き合う喜びを、日々感じています。

松本でやってみたいこと

松本市では年間500ものお祭りが開催されていると言われています。そんな地域のお祭りに参加してみたいです！暮らしと文化が交差する街だからこそ、手仕事などのイベントも企画してみたいです。

川合沙代子 2022年東京から松本に移住。2024年出産し1児の母。マツモト建築芸術祭実行委員、東アジア文化都市松本2026実行委員。

奈川獅子 を観に行く

令和6年の芸術監督団キャラバンで奈川支所を訪れた際に、奈川獅子の資料を見て、説明を受けてから、「一度実際に見てみたい」と口々に言っていた監督団の面々。折しも令和7年のお祭り当日の9月6日(土)、芸術館では今年度本格始動したSTEP Mの講座中。講座終了後、若きダンス作家と講師の山田せつ子さんもお誘いして、いざ奈川へ。芸術館から車で約1時間、18:00過ぎに現地着。車から降りるととにかく寒い！ 屋間半袖で過ごしていたのに、予想を超える寒さに石丸さんが全員にくださった温かい缶コーヒーをカイロ代わりに会場へ。境内はまだ人はまばら。神社の由来などを読み込む木ノ下さん。地元の人にはダウンコートに毛布と万全の防寒対策。標高1200m恐るべし。



「奈川獅子」とは……。

平成19年に松本市重要無形民俗文化財に指定された信州奈川寄合渡地区のお祭り。昔々実りの秋、豊作目前に農作物を荒らす一頭の大獅子と、こん棒片手に立ち上がった村人が大獅子を仕留めるまでを五節で描いた獅子舞。大正初期に始まり、笛や太鼓、鐘など鳴り物と天狗のはやしが場を盛り上げます。大獅子は一見悪者ですが、民話神話世界の霊獣でもあり殺すのではなく、獅子に宿った災厄を祓い除くための祈祷でもあり五穀豊稔、家内安全を願い獅子舞を奉納しているのだそう。毎年9月第1土曜日に、寄合渡地区の氏神(天宮大明神)境内において午後7時30分より約2時間にわたって5種類の舞が繰り上げられます。

- 1 祇園囃子** 田畑を荒らし村人を苦しめている獅子
- 2 清森** 獅子との格闘。苦戦する村人。そこへ天狗が現れようやく獅子を討ち取る
- 3 吉崎**
- 4 獅子殺し 切り返し** 村人が喜んでいると獅子が生き返ってしまった
- 5 薙刀** 村の薙刀名人が再び大獅子に立ち向かう。天狗から薙刀を授かりついに獅子を退治する



屋台のたこ焼きなどつまんだりしていると、いつの間にか境内は、すっかり人で埋まっていました。天狗が登場し、コミカルな動きで観客を煽ります。STEP Mの若き作家たちも舞に合わせて身体を動かし、「案外難しい」「あの動き面白い」など真剣な眼差し。「なにか協力できないかなあ？」ポツリと倉田さん。

現在は少子化に伴い奈川全戸の子どもたちに呼びかけているそうで、多くのお子さんが参加していました。さらに小さな子どもたちが一生懸命真似をして踊っている姿もとてもかわいらしかったです。数年後には、きっと衣裳を着て舞っていることでしょう。市外に家を構えている若い世代も祭りの数ヶ月前になると実家に帰ってきて、練習と次世代を担う子どもたちへ指導もしているとのこと。静かな集落の夏の夜を彩る伝統の獅子舞。いつまでも継承されていきますように。



日本海と松本をつないだ塩の道とブリ街道

当時、新潟・糸魚川から千国街道を通して、松本に塩と海産物が運ばれた。そのルートは「塩の道」として整備され、松本藩では北塩専売制を設けて塩の流通を日本海側からのみに制限した。一方、飛騨高山から続く野麦街道は、塩や穀物の輸送も禁じられ、魚だけが運ばれていた。ゆえに記録もないらしい。さらに厳しい地形で、冬場は牛馬が入れないほど雪が深い難所。古くから東西南北の文化、物資の集積地・中継地だった城下町・飛騨高山の歩荷（ぽっか）によって10日以上かけてブリが運ばれた。そのため高級魚のブリは、さらに値段が上がり、松本に着いたときは浜値の4倍、米一俵と同じ値段がついたとか。ブリを手に入れ、風呂敷に包み、尾びれをあえて外に出して持ち帰ったりしたのだそう。また庶民にも手に入りやすく、豊作や厄除けの魚として、イワシも食べられた。現代のような冷蔵・冷凍設備もなく、前述のように輸



家が繁栄するようにとの願いを込めて
恵比寿にブリの尾をお供えた

送手段も限られていたため、ブリは塩を揉み込んだ加工がされ、長期保存に耐えるしつらえを取られた。それを「塩ブリ」と言い、松本平に届くころには熟成発酵により旨味が凝縮され、美味しくなった。当時は、茹でて醤油を垂らして食べるのがオーソドックスだった。その後、時代を経ると「塩ぶり煮」「雑煮」「ぶり大根」「ぶりの粕煮」なども調理された。

1902年に国鉄（今のJR）・篠ノ井線が開通し、信越線と接続するなど輸送体系が変化したことで、野麦峠を経由していた塩ブリは消え去ることに。しかし、飛騨高山では毎年クリスマス前後に行われる塩ブリ市が風物詩になっており、松本でも、冬になると小売店に塩ブリが並ぶ風景が見られた。

松本市立博物館が描いたブリの道

松本市立博物館では、2001年11月24から翌1月14日まで特別展〈鯨のきた道〉を開催した。会期中にはブリを食べるブリ祭り、「鯨のきた道すごろく」を作成・販売するなど、市民ばかりでなく学芸員をはじめ職員みんなが楽しんで企画を考えたそうだ。『鯨のきた道』は、特別展の好評にこたえ展示概要をアレンジしてその1年後に刊行された1冊だ。

皆さんはどんなお料理で年を越しましたか？



『鯨のきた道-越中・飛騨・信州へと続く街道-』



塩ブリの あじの 雑煮

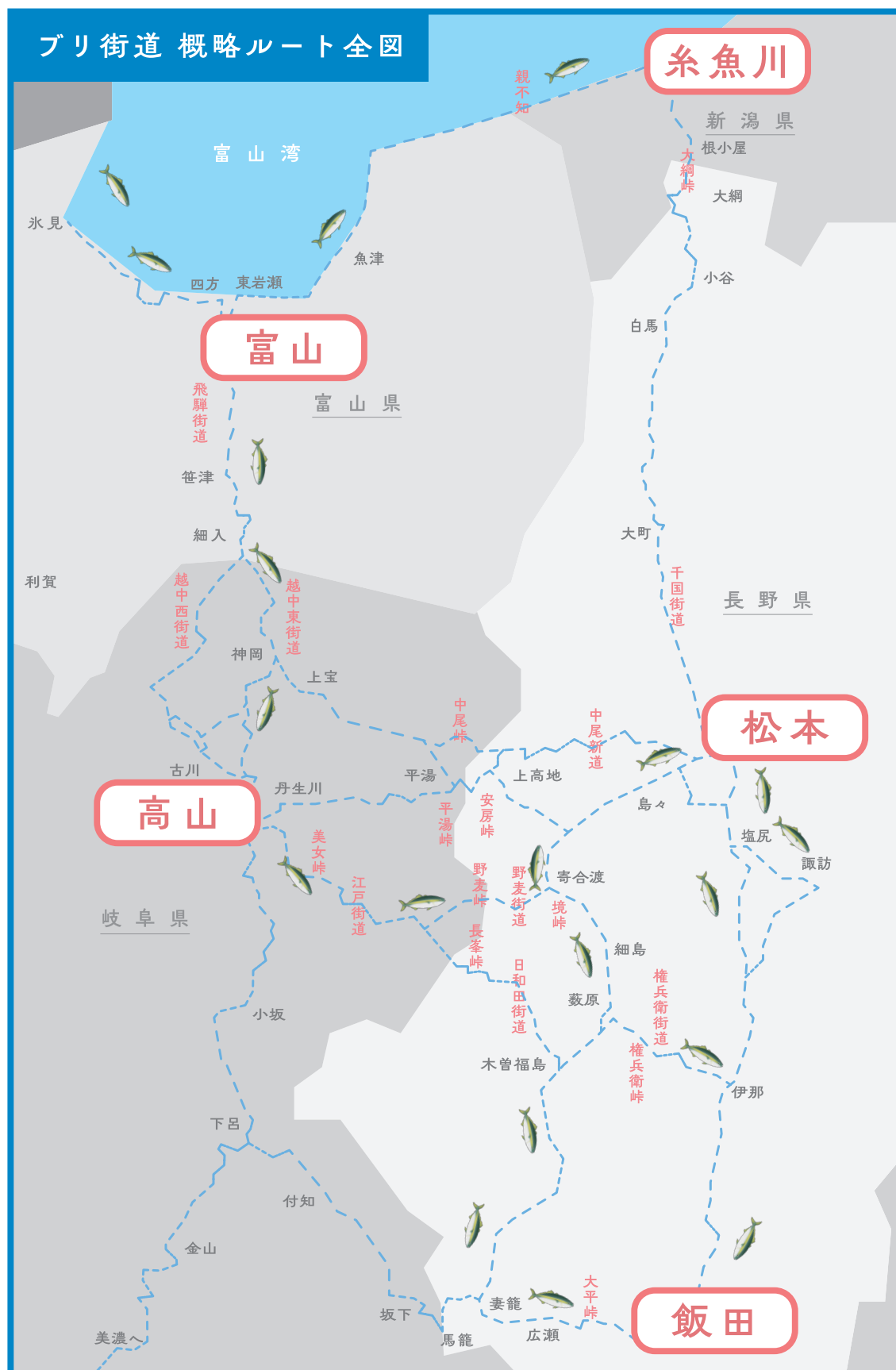
塩ブリは沸騰したお湯に入れ、臭みを抜き、冷水につけて調理するんです。それでも照り焼きにしたくらい塩味は残りました（氷見の業者さんによると、健康志向のため、昔よりは塩分はかなり控えめになっているそう）。出汁はこんぶに少しだけ鰹節を使って、お酒と塩で味付けしました。塩ブリはどうしても脂が抜けてパサパサしてしまいます。現代なら、お雑煮よりも、脂の乗ったブリを、しゃぶしゃぶにした方が美味しく食べられるのではないのでしょうか。

調理協力：山田憲作さん（トキシラズ）

出典
『鯨のきた道-越中・飛騨・信州へと続く街道-』
松本市立博物館編 2012 オフィスエム
『牛方・ポッカと海産物移入』胡桃沢勘司編著 2008 岩田書院
『水の文化』29（魚の漁理）2008 ミツカン 水の文化センター
『今日の長野県南信・中信南部における年取りでのブリ食の実態と評価』
林紀代美 2020 アサヒグループ財団

写真提供：松本市立博物館

ブリ街道 概略ルート全図



松本ブリ街道

Matsumoto Yellowtail Road

～年末年始にブリ料理は何を食べましたか？～



射水市下村の賀茂神社では鰯は神からの授かりものとして「鰯分け神事」を行っている

“お年取りの魚” なんていう言葉、今も存在しているのだろうか。大晦日に一年の無事を感謝するとともに、豪華なお祝いの料理を食べる。その習慣は東日本に属するが、“お年取りの魚”としてブリを食べるのは、西日本に多い。フォッサマグナを境に、東日本の鮭文化圏と西日本のブリ文化圏があり、フォッサマグナの西側は糸魚川ー静岡構造線、ちょうど松本あたりで分かれるという説もある。犀川を遡上する鮭を差し置いて、ブリが松本平を闊歩したのはブリ街道の存在が大きい。運良く出会った『鰯のきた道』という1冊をベースに松本のかつての庶民の暮らしをたどってみた。

“お年取りの魚”ブリは庶民のステイタス

11月から12月にかけて、富山湾など日本海で水揚げされる寒ブリが、富山から飛騨高山を経由し、飛騨山脈を越えて松本平へ運搬された交易経路を「ブリ街道」と呼んだ。旧野麦街道の通称だ。ブリは回遊魚だが、初冬から獲れるブリは非常に脂がのっていて、肉厚とされている。成長するにつれて名前が変わる出世魚として、高級とされ、加賀藩の藩祖・前田利家のころからお歳暮に贈る慣習もあったそう。

ブリは1500年ごろから現在の富山や新潟で漁獲され始めたとされている。記録が残っているのは幕末になってからで、万本単位で松本、松本を起点として諏訪や伊那・飯田に届いていたと推測される。



イルミネーションと夜道

松本城から縄手の入口までの通りを「大名町通り」というが、ここの冬の様子を描いたら絵になるだろうと思った。でも正直に言うと、ちゃんとイルミネーションを見に行ったことがない。12月から1月は仕事が忙しく、朝からこもって作業をして、夜の

忘年会が唯一の外出となることも少なくない。時間直前にバタバタと家を飛び出し、店に向かう途中に大名町を通りかかって「あ！こんなに綺麗だったんだ！」と慌てて気付くのである。

ピカピカ眩しいというよりも、寒いからか人通りの少ない通りに光が灯っている様子が幻想的だ。この装飾された街路樹は「シナノキ」といって、6月に



は良い香りの白い花を咲かせるらしい。枯れた木々を見ながら正反対の季節を想像してみるのも面白い。

大晦日や正月周辺の数日間とはくに、松本の街中は帰省してきた人達で沸き立っているのが分かる。各所で集まりが開かれ、店の扉を開くたびに先客とチラチラ目が合って「誰かに偶然会っちゃったりして」というような楽しい期待を感じる。

賑やかだった店を出る頃には、外の空気が痛く感じるほど冷え込んでいる。すっかりイルミネーションの消えた大名町通りを歩いて帰り、暗闇に浮かぶ松本城をどうしたら格好良く撮影できるか試行錯誤するうちに完全に酔いが覚める。暗い夜道は心細いけれど、星を見ながら黙々と歩くのが一番好きだ。家に着く頃には汗をかいていて、さっき見かけた光る街路樹の景色が思い浮かんでくる。



Illustration & Text
otama

太田真紀／イラストレーション、ビジュアルストーリーテリング、またそれらを軸としたデザインなどが得意。デザインファーム・Takramでの勤務を経て、2021年4月よりイラストレーターとして独立。松本に住んでいますが、まだまだ知らないことばかりです。
otama-ki.com



[特集]

ブリと松本

vol.
08

2026
Winter

ねーあー

